

# 思　い　出

昭和女子大学大学院委員会委員長  
平　井　聖

私にとって、大学院での最も印象的な出来事は、平成9年度の課程博士の審査を審議した大学院委員会のときのことです。生活機構研究科は、当時委員長であった福場先生のご努力で、生活科学の食物関係の分野で次々と課程博士を送り出すようになっていました。科学的な分野では、新制度になった大学院では、3年という博士（後期）課程の在学期間の中でまとめられた論文を審査して博士の学位を与え、研究者として独り立ちできるというスタートラインに立たせると考えていたのに対して、文学研究科は博士号が、功成名を遂げた人が、それまで一生かかって研究してきたことをまとめた論文に対して与えられるものであるという旧制度の考え方を守っていたのです。

この年度の終わりに近い頃の大学院委員会で再びこの考え方の違いが問題になり、生活機構研究科は安易に学位を出すといわれたのです。そして、統一した学位の審査基準をつくるべきであるとまでいわれました。その審査基準の中に、外部の学会等の審査つき論文が何篇以上あるか、その篇数をきめようということがありました。そこで私は新制度の課程博士についての考え方を説明した上で、学位の審査には5人の審査委員を選んで審査を委任する制度である以上、審査するのはこの5人の審査員であって、審査の基準は多岐にわたる生活機構研究科では、一律にきめることは出来ない。外部の学会に投稿してその論文が認められるということは好ましいことではあるが、論文の価値を見極めるのはあくまでも審査委員である。大学院の教員の権利として論文の審査権とも言うべきものがあり、極端に言えば、課程博士の審査に当たって、外部の機関において審査つきで公表された論文の数をきめ、その数を勘定するだけならば審査とはいえない、審査権の放棄であると主張したのでした。ほかで認められたということは大切なことですが、学位はあくまでも昭和女子大学が出すのですから、学位論文を構成する論文をどこかの学会に出したか出さなかったかは関係のないことです。この考えは、今でも変わっていません。大学院の教員として確信を持って論文の価値が判断できるかどうかということは学位審査にとって根本的なことですから、安易に他に頼るべきではありません。

この発言によって、その後まもなく全員に配布された教員の所属リストから私の名前が消えたのでした。本当は生活機構学専攻主任の役職をはずされたのですが、事務的な手違

いで学科、専攻の所属教員のところに入れるべき私の名前が落ちてしまったのです。そのために、どうなったのかと心配してくださった先生方も多かったのです。

このいきさつを、当時の学長人見楠郎先生は御存知なく、私のNHK大河ドラマの時代考証など学外での仕事がいそがしいので専攻主任を辞任したと伝わっていたのか、その後お目にかかった折に、ねぎらって下さる様な笑顔で、「大河ドラマ、いつも見てますよ。」と声をかけて下さいました。その御心に、大変うれしかったのですが、何とお答えしていかわからず、とまどうばかりでした。

今では、文学研究科も課程博士を出すようになりました。しかし、このシーンは、振り返ると、私にとって一番印象に残っている光景です。

